

# 「置き土産」

—2稿—

2023/7/18

雨森 れに

〈人物表〉

太田 マキ

(42)

お酒が好きな女性。明るい茶髪のボブ。

ホスト

(25)

BTSのジミン似のホスト。金髪で短髪。

店主

マキのいきつけのBarの店主

〈ログライン〉

朝帰りのマキがホストを家に招き入れ、ホストに怪異を置いていかれる

〈ねらい〉

怪異の始まり、怪異の謎を感じさせる

## 1. ローターリー(朝)

繁華街と駅の間にある小さいロータリー。

端のほうで金髪のホスト(25)がスマホを触っている。

左腕の上になにかが落ちてくる。見ると数本の黒く長い髪の毛。慌てて払い落とす。

ホスト、焦ったようにまわりを見渡し、通行人の女性に話しかける。

## 2. Bar・店内(朝)

小さな個人Bar。カウンターで太田マキ(42)が無表情で酒を飲んでいる。

マキ 「(グラスの酒を飲み干して)ていうかさ。自分が本命じゃないってわかってて付き合うって、どういうことだと思う?」

店主、グラスを回収し水を出す。

店主 「前話してた彼氏の浮気相手の話?」

マキ 「元。元カレね。相手はどういう神経してたのかわかって」

店主 「略奪するつもりだったんでしょ。ほら、彼の家にはピアス落ちてたとか言ってたじゃん。マーキングってやつよ、それ」

マキ、ピアス穴のない自分の耳に触れる。

店主 「化粧品とかさ。髪? そういうの置いて存在アピールするんだよね、そういう子って」

マキ 「わざとってことだね。あー、思い出しただけで腹立つわ」

マキ、水を一気に飲みする。

店主 「あ。マキちゃん、そろそろ始発出てるよ」

マキ 「もうそんな時間? なんかずっと愚痴ってたよね。ごめん」

店主 「いーよ、いーよ。そういう日もあるって。今日は5千円ね」

マキは鞆から財布を出し、5千円札を渡す。

店主、笑顔で受け取り、レジにしまう。

マキ、スマホを取り出す。ロック画面に時刻とBT  
Sのジミン。

マキ 「もう5時過ぎてんだ。また来るね」

マキ、店主に手を振って店を出る。

### 3.           ロータリー（朝）

マキは駅に向かって足早に歩いている。手にはスマ

ホ。

ホストが後ろからマキの肩を叩く。

ホスト 「おねーさん、ちょっといいですか」

マキ 「ひゃっ」

マキ、驚き、後ろを睨む。が、ホストを見ると目を

見開き、スマホを強く握る。

ホスト 「突然すみません。あの、家に連れて行ってくれま

せんか？」

マキ 「え？ ええ？」

ホスト 「今日、泊まるところがなくて困ってるんです」

マキ、口に手を当てて考えるそぶりをしながら、

マキ 「えっと、それは、あとから店に来てもらうための

営業？」

ホスト 「営業じゃないんです。……帰れないし、もう、後

がないんです」

マキ 「後がない？ やっぱ営業成績の話なんじゃん」

ホスト 「違います！ じゃ、じゃあ僕の名前も店も連絡先

も教えません。だから、お願いだから信じてくだ

さい。泊めてください」

ホスト、マキに向かって深々と頭を下げる。

マキ、スマホのジミンを見る。

マキ 「普段家に入れないんだけど……君ならいいか

な」

ホスト 「ホントですか！ ありがとうございます！」

マキ 「お礼はBTSのジミンに言って。ね、似てるって

言われない？」

ホスト「あ、ジミン推しですか？ よく言われるんですよ」

ホスト、笑う。

#### 4. 部屋（朝）

1DKの部屋。

缶チューハイの入ったレジ袋を提げたマキとホストが入ってくる。

マキ「お腹すいたら冷蔵庫の中のもの、好きにしているから。あっちが台所、こっちがトイレで、隣がお風呂」

ホスト、部屋を見渡してから足元を見る。

ホスト「部屋、めっちゃ綺麗ですね。僕んちなんてあっちこっちホコリ落ちてるのに」

マキ「意外でしょ。元カレにも家の掃除だけはきちんとしてるって言われたもん。ほら、こっち座って」

マキ、ベッド前のテーブルに缶を並べる。

マキ「じゃ、日本のジミンとの出会いに」

ホスト「ほんつとにジミン好きなんですネ」

マキとホスト、缶を開け笑顔で乾杯する。

× × ×

テーブルの上で散乱する空き缶。

ホストはマキに肩を貸し、髪を撫でている。

マキは目を閉じて身を任せている。

ホスト「マキさん、髪、いい色ですよネ」

マキ「ボブだと色ぐらいでしか遊べないからね。あー、眠くなってきたやつた……」

マキ、眠そうにしながら、テーブルの上の缶を指差す。

マキ「あとでゆすぐから、流しに置いて」

ホスト「へー、ちゃんと洗うんですね。えらい」

ホスト、缶を集めて台所に向かう。

マキはその背中を眺める。

マキ「あのさあ。なんで帰れなかったの」

ホスト「え？」

マキ「ホストが帰れないんてき。寮でなんかあったか、女とトラブルになったかってどこじゃん」

ホスト「それは」

マキ「彼女と、喧嘩した？」

マキ、真剣な顔でホストを見つめる。

ホスト「……まあ。そんなところです。彼女、置いていきたくて」

マキ「やっぱ女かあ」

マキ、ベッドに入り、背を向ける。

後を追うようにホストもベッドに入る。

ホスト「拗ねてます？」

マキ「眠いだけ。鍵、靴箱の上にあるから。出るときに玄関のポストから投げ入れといて」

ホスト「絶対拗ねてますよね」

ホスト、マキを抱き寄せながら、

ホスト「僕がマキさんをどんなに好きか心の中を見せてあげたい、本当に」

マキ、吹き出して笑い、顔をホストへ向ける。

マキ「その顔でジミンのセリフ言うのはずるいんだって」

ホスト、マキに口づける。そのままマキに覆いかぶさる。

マキ、ホストの首に手を回す。

部屋のカーテン越しに黒く長い髪の女の影。

## 5. 浴室・外(朝)

シャワーの水音。

戸のすりガラス越しにホストがシャワーを浴びているのが見える。

## 6. 部屋(朝)

マキ、寝ている。

ベッド横に女の青白い脚。その近くに女物のピアス

がひとつ落ちていた。

7. 部屋(夕)

目覚まし時計が16時を示し、アラームが鳴る。マキ、体を起こして部屋を見渡す。テーブルの上にメモを見つける。『置いてくれてありがとう』と書いてある。慌てて立ち上がり、玄関に向かう。足元のピアスには気付かない。

8. 玄関(夕)

マキの靴だけが脱ぎ捨てられている。マキ、落ちていた鍵を見つけ、靴箱の上に置く。大きいため息をつき、浴室へ向かう。

9. 浴室・内(夕)

立って髪を洗うマキ。外側、すりガラス越しに黒く長い髪の女の影。マキ、髪をゆすいだから、排水溝の蓋に指をかける。中には大量の黒く長い髪の毛。

マキ 「(排水溝から離れて) えっ? なにこれ!?’」  
まわりを見渡してから、鏡に視線を移す。  
鏡に映るマキの体にも数本、黒い髪の毛がついている。  
取ろうとすると、上から数本、髪が落ちてくる。  
マキ、ゆっくり上を見る。  
天井に束になった黒い髪がいくつもへばりついている。  
マキ、濡れたまま浴室から逃げ出す。

10. 部屋(夕)

マキの荒い息遣いの音。  
マキはタオルを体に巻き付けて床に座り込んでいる。  
部屋中に視線を泳がせたのち、メモを見る。

マキ 「置いてくれてありがとう……」

動かした手にピアスが触れる。

それを見て、目を見開く。

マキ 「『彼女、置いていきたくて』……」

天井から床に黒い髪が束で落ちる。

マキ、口元を手で覆う。

続いて片方だけのピアスが数個、床に落ちる。

マキ、ゆっくりと上を向く。

つづく